

Vol. 999

平成 31 年 3 月 3 日（日）

「産業の発展」

これからの、農業及び青果物流通という産業の方向性は。

他産業発展の歴史を学ぶことで、大きな流れは予測できます。

ドイツの鉄血宰相ビスマルクが指摘したように、「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」です。

産業の発展では、合従連衡が進み、社数が大幅に減り、集約されていきます。

集約された数少ない企業（群、グループ）は、急速に規模が拡大し経営基盤が強化されます。

また規制緩和も進み、業務内容は高度化し、また他分野も取り込んで高付加価値化していきます。

そして、グローバル企業として、国際競争の中でより鍛えられ、より成長していきます。

このような観点から見ると。

農業及び青果物流通が、他産業と比較して、産業としての発展が遅れてきたことは明らかです。

だから逆に言えば、その遅れた部分が、これからの農業及び青果物流通の発展の可能性です。

大いに伸びしろがあるということです。

僕がかつてお世話になった銀行業界は。

僕が入社した当時の 1988 年は、都市銀行や信託銀行など、大手の全国銀行が 20 社近くでした。

それまで好景気の金融業界が、90年代半ば以降のバブルの崩壊により、一気に不況に突入し、そして一気に再編成が進みました。

いまは、事実上 4～5 のグループに統合されました。

かつては規制されていた、保険や証券業務など業務範囲が拡大し、また各社独自の営業展開が可能になりました。

僕のいた 30 年前は、金融業界は国内産業のイメージでしたが、いまや完全にグローバルカンパニーでありグローバル産業です。

日本をリードする自動車産業も、かつて大きな危機と再編成を乗り越えてきた結果です。

1960年代、自動車メーカーは 18 社もあったそうです。

弱者乱立では欧米に勝てないと、通産省がリードして、合従連衡が進みました。

いまや農機メーカーのヤンマーさんは、かつてはディーゼル軽自動車を販売していたそうです。

自動車産業の前は、国内産業の中心的存在であった繊維産業も、再編成の繰り返しです。

かつては養蚕が盛んであった日本の中で、第二次世界大戦前までは好景気で。

しかし戦後、戦災や原料が手には入りにくいなどにより、壊滅的状态に陥り。

1960年代以降様々な法律改正等が行われ、合理化・近代化や、自由競争が促進。

リストラチャリングが進み、グループ化も進み、繊維産業の非繊維事業も進み。

厳しい環境こそ、新たな世界への幕開けです。